こんな疑問がわいてきた

大阪大学大学院国際公共政策研究科
教授　林　　敏　彦

ぼんやりテレビを見ている時間は結構長いほうだと思います。だからこんな疑問がわいてしまうんですが。

最近テレビが面白くないのはなぜだろう

どうも日本のテレビは、野球とサッカー以外、プロというものが嫌いなようですね。放送関係者に会うと、異口同音に、テレビはＴＶジャーナリズムを目指すべきだとおっしゃるけど、ほとんどのニュースキャスターはプロのＴＶジャーナリストとは言えませんね。そのくせ不遜にも、生身の人間がギリギリのところで犯した犯罪などに、正義漢ぶった「コメント」を付け加えたりするんですから。

ドラマの俳優には基礎的な訓練が全くできていない素人が多いですね。数年前ＮＨＫの時代劇に出演した中年の男優は、死ぬ場面で本当に死に顔をしていました。１週間以上絶食でもしたのでしょうか、彼は頬がこけ、目がくぼんだ老武者の顔で死にました。あれほどの迫力ある演技を時々は見たいものです。

歌番組の出演者に至っては聞くに耐えないことが多すぎます。アイドル歌手の歌と航空会社国内便の英語のアナウンスだけは、耳を覆いたくなりますね。

バラエティ番組のくだらなさもいいかげんにしてほしい。そう言ったら、放送界のある大物経営者にやんわりたしなめられました。「先生あのね。くだらない番組を作るって、結構難しいんですよ。」―なるほど。だから、日本のバラエティ番組の企画が東南アジアの放送局にも売れるんですね。

ニュースやトークショーに出てくる大学の先生も、なぜこの先生がこのテーマで出てくるの、と首をかしげることが多いですね。必要なのは出演者の肩書きとサービス精神だけであって、専門家としての知見ではない、と言われているみたいです。ここでもきっと本当のプロは邪魔なのですね。

要するに、テレビ局は１８才ぐらいの人生経験の浅い女子高校生をターゲットに番組を作っていて、テレビが面白くないと思う人は、おじさん度が高いだけ、ということなのでしょうか。でもね。既に日本は高齢社会なのですよ。高齢者は演歌と時代劇だと思うのは間違っていますよね。本物を見抜く目を持っていて、趣味が良くて、人生への理解度が高くて、お金と時間に余裕があって、クオリティにこだわる高齢者が結構たくさんいるんですよね。

テレビ局って結構もうかるらしいですね

あるテレビ局の元プロデューサーが恐喝事件を起こしたというニュースが流れました。彼は年俸２０００万円で１５年間勤めたときの遺失利益を根拠に、被害者に３億円をゆすったといいます。プロデューサーの仕事がどれほどのものなのか私には分かりません。私が知っているのは、国公立大学の教授の年俸が生涯決して２０００万円にとどかないことだけです。プロデューサーの数は日本中の教授の数よりはるかに少ないでしょうから、きっと希少価値が高給につながるのでしょうね。

それにしてもなぜテレビ局はそれほどの高給を払えるのでしょうか。

どうも放送事業自体が収益率の高い産業らしいですね。民間放送全体の年間売上高は、携帯電話のドコモ全社の売上高より小さいとはいうものの、地上系民間放送事業者１９６社の売上高経常利益率は平成９年度で８．８％でした。これより高い経常利益率を上げているところは、医薬品産業以外にありません。

それにもかかわらず、テレビ局は衛星放送への出資にお金がかかったので、地上波放送をデジタル化するための設備投資にはとても耐えられない、とおっしゃる。いや、大手はまだしも、ローカル局は大変だともおっしゃる。たとえば、民放連研究所の試算では、２０１０年時点の経常利益率は、東阪名１５局でも２％程度にまで低下するとおっしゃる。でもね。日本を代表する商社が２％の経常利益率を実現できたら、お祭り騒ぎするでしょうね。

コンテンツやあい

テレビ放送がデジタル化したら、チャンネル数を増やせるけれども、放送するコンテンツが足りないとよく聞きます。広告料収入がいろんなメデ

ィアで取り合いになって、制作費が減ればますますコンテンツの確保が難しいですって。でもね。ハリウッドのように、コンテンツのマルチユースというんですか、１つの作品を何度も売れるようにすれば制作費の回収ができますよね。

　そうすると出演者のすべてに肖像権や著作権の再使用を認めてもらうのが大変だ？。でも、アメリカのように権利にうるさい国でも、１本の映画が１０回も売れる仕組みができているんですよ。出演者だって作品ができるだけ大勢の人の目に触れるほうが嬉しいと思うんですがね。イメージを大事にする俳優は、子役時代の作品の再放送を望まないことがあるらしいですね。でもね。自分が生きてきた過去に言い訳できないような俳優を、これからもテレビは大事にするのでしょうかね。

　ともかく、デジタル化もビッグバンも、それでテレビ番組が面白くならなければ意味ないですよね。

社団法人　日本民間放送連盟
『月刊民放』３月号「放送時評」